

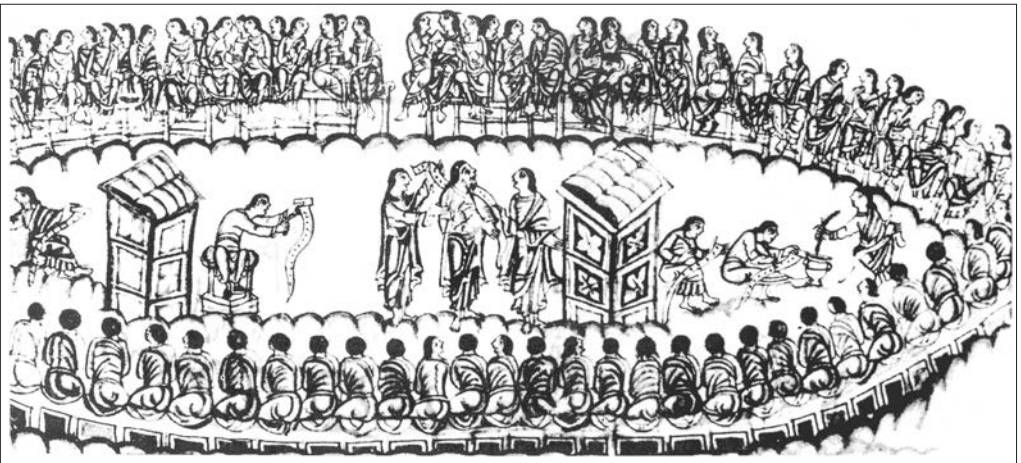
# 日本中世英語英文学会 第36回全国大会

プログラム・発表要旨

時：2020年12月5日(土)～15日(火)

所：ウェブカンファレンス方式

The 36th Congress  
The Japan Society for Medieval English Studies  
5-15 December 2020  
Web Conference



日本中世英語英文学会

## 目 次

会長挨拶	3
プログラム	4
Programme	5
発表要旨	
招聘講演	6
企画シンポジウム	6
研究発表	9

会員の皆様におきましては、別途お伝えする大会 ID とパスワードを  
控えたうえで、大会サイトへアクセスしてください。

### 大会準備委員

和田忍（委員長） 伊藤盡（副委員長）  
岡本広毅 鎌田幸雄 佐藤桐子 野地薫 守屋靖代

### 事務局

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45  
慶應義塾大学文学部 堀田隆一研究室内  
Tel. 03-5427-1226

## 会長挨拶

会員の皆様

仲秋の候、会員の皆様には、いかがお過ごしでしょうか。すでにご案内のとおり、12月に福井大学で開催予定であった第36回全国大会は、新型コロナウイルス感染の収束が見られないなか、集会形式ではなくウェブカンファレンスという形をとることになりました。オンライン開催についてご快諾いただいた発表予定者の方々には改めて御礼申し上げます。また、大会準備委員会と事務局のメンバーは初めての試みに伴うさまざまな困難を1つ1つ丁寧にクリアしてくださいました。

本年度の大会は、シンポジウムや研究発表に加えて、海外からの講師による講演も予定されております。従来の大会ですと、同時進行の発表は一つしか聴くことができませんでしたが、ウェブカンファレンスでは（もし希望される場合）全ての発表に出席可能です。ウェブ上での質疑応答の場も設けてありますので、活発な議論・意見交換があることを願っています。それでは、会員の皆様がふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

2020年10月吉日

日本中世英語英文学会  
会長 寺澤 盾

# 日本中世英語英文学会 第36回全国大会プログラム

2020年12月5日(土) 12:00~15日(火) 24:00

## 開会の言葉

会長 寺澤盾 (東京大学)

## 招聘講演

“In a swoghe silence”: The Spiral of Silence, Noise, and Sound Effects in *Sir Gawain and the Green Knight*

Jordi Sánchez-Martí (University of Alicante)

## 企画シンポジウム

ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷

総合司会 大沼由布 (同志社大学)

- I. ユダヤ教伝統における「巨人」伝承の周縁性  
勝又悦子 (同志社大学)
- II. Gigantes の運命—古代中世ヨーロッパの巨人伝承の変遷  
大沼由布 (同志社大学)
- III. 中世イスラーム世界における巨人像—ペルシア・アラビア語博物誌に見るアードの民  
山中由里子 (国立民族学博物館)
- IV. ゴグマゴグ討伐とブリテン建国一年代記とロマンスにおける巨人像の変遷  
岡本広毅 (立命館大学)

## 研究発表

1. *Henri wæs gehaten* 一人・場所・物の呼び方  
小倉美知子 (千葉大学名誉教授)
2. コーパス (YCOE) に基づく古英語の時制辞の語順変化の分析  
小林茂之 (聖学院大学)
3. キリスト教的教訓伝達媒体としてのラテン語箴言: 『農夫ピアズ』と  
*Auctores octo*  
西川雄太 (慶應義塾大学大学院)
4. Material Aurality: Text, Image, and Stone in Early Medieval England  
Britton Brooks (東京大学)
5. 英訳聖書における使役動詞 *let* の補文に出現する不定詞の分布と *let NP to-Inf* の衰退要因について  
村岡宗一郎 (日本大学大学院)
6. *Pearl*: 平凡な宝石商に見る崇高な魂

渡辺直子 (産業能率大学)

## 閉会の言葉

副会長 和田葉子 (関西大学)

# PROGRAMME

## Opening Address

TERASAWA, Jun (President of JSMES, University of Tokyo)

## Special Lecture

“In a swoghe silence”: The Spiral of Silence, Noise, and Sound Effects in *Sir Gawain and the Green Knight*

Jordi Sánchez-Martí (University of Alicante)

## Special Symposium

Images of Colossal Peoples in the Jewish, Islamic, and European Cultural Spheres

Prsided: ONUMA, Yu (Doshisha University)

- I. The Marginality of Giants in the Jewish Tradition  
KATSUMATA, Etsuko (Doshisha University)
- II. The Fate of the Gigantes: Tracing the Representation of Giants from Classical to Medieval Europe  
ONUMA, Yu (Doshisha University)
- III. Giants in Mediaeval Islamic Cosmology: The Ād in Persian and Arabic Encyclopaedias  
YAMANAKA, Yuriko (National Museum of Ethnology)
- IV. The Defeat of Gogmagog and the Founding of Britain: Changing Roles of the Giant in Chronicle and Romance  
OKAMOTO, Hiroki (Ritsumeikan University)

## Paper Sessions

1. *Henri wæs gehaten*: How to Call a Person, a Place, or Other Things  
OGURA, Michiko (Chiba University, Professor Emerita)
2. An Analysis of the Change of Word Order of Tense Elements in Old English: on the Basis of YCOE  
KOBAYASHI, Shigeyuki (Seigakuin University)
3. A Medium for Pastoral Care: Latin Proverbs in *Piers Plowman and Auctores octo*  
NISHIKAWA, Yuta (Keio University)
4. Material Aurality: Text, Image, and Stone in Early Medieval England  
Britton Brooks (University of Tokyo)
5. The Distribution of the Infinitival Complement of the Causative Verb *let* in English Bibles as a Factor in the Decline of *let* NP *to*-Inf  
MURAOKA, Souichiro (Nihon University)
6. The Mediocre Jeweler’s Noble Soul in *Pearl*  
WATANABE, Naoko (Sanno University)

## Closing Address

WADA, Yoko (Vice-President of JSMES, Kansai University)

## 発表要旨

### 招聘講演

#### “In a swoghe silence”: The Spiral of Silence, Noise, and Sound Effects in *Sir Gawain and the Green Knight*

Jordi Sánchez-Martí (University of Alicante)

The Christmas celebrations at Camelot produce sounds that are easily recognizable in the context of the court: ‘Such glaum and gle glorious to here, / Dere dyn upon day, daunsyng on nightes’ (ll. 46–47). More specifically, when the first course is served on New Year’s Day, it is announced ‘with crakkyng of trumpes’ (l. 116) and other kinds of musical accompaniment. These sounds are part of the conventions and protocols used at the court to create a sense of order, endowing courtly activities with solemnity. But they also perform a social function, namely to convey a sense of stability and safety that were guaranteed by King Arthur and his knights. The unexpected arrival of the Green Knight is meant to destabilize the court and challenge the status quo. Not surprisingly his coming is signalled by ‘An other noyse’ (l. 132), one that initially seems extraneous and alien to the court. The Green Knight’s appearance and speech make a dramatic impact upon all those present and a sudden silence falls over the room. This talk will explore how the *Gawain-poet* exploited sound effects and their absence—i.e., silence in its various meanings—as structural elements in the narrative design of the romance.

### 企画シンポジウム

#### ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷

総合司会 大沼由布 (同志社大学)

巨人族をはじめとする異形の民は、人間に似た姿形をもちながら、人間とは異質の民として、地域を問わず、古代中世の記述にしばしば現れる。それらは、敵対者・不信心者といった他者の表象として登場することが多いが、善なる巨人として登場する場合も見られ、いずれにしてもその異形性のためか、周縁的

存在である。そして、中世英文学から見た場合、ユダヤ教徒やムスリムという、同時代の中でキリスト教徒が他者とみなしたのものや、ヘブライ語聖書、ギリシア・ローマ文学、ケルト文化など、時代を隔てた他者にも由来する。本シンポジウムでは、中世英文学にとって、かかわりの深い「他者」であるユダヤ教文学と、アラブ・ペルシア文学の専門家を迎え、それぞれの文化圏での巨人表象と、西洋中世の様々なジャンルでの巨人表象とを併せて掲示する。それにより、巨人族のイメージの変遷を追い、西洋中世を取り巻く状況を確認するとともに、他文化とのつながりを考えたい。

## I. ユダヤ教伝統における「巨人」伝承の周縁性

勝又悦子（同志社大学）

ヘブライ語聖書にはイスラエルの民が放浪した地に「巨人」が存在したとの言及が断片的に見られる（民数記13章、申命記2章他）。彼らは神と人の娘の間にできたネフィリム（創世記6章4節）の子孫ともされる。この限定的な「巨人」言及に対して、後代のユダヤ教伝統では様々な解釈を加え「巨人」のイメージを膨らませた。そこには二重の周縁性がある。第一に、「巨人」はイスラエルの周縁を囲む外敵であること、第二に、「巨人」に強い関心を寄せるのが外典・偽典文学、カバラー等の正統派ユダヤ教の周縁的伝統ではないかということである。解釈の過程で聖書本文にはない邪悪さ、「異形」性が付加されていくと同時に、聖書では外敵であった「巨人」が、エノク伝承、ゴーレムなど周縁的ユダヤ教の内部にも育つ。本稿では、広義のユダヤ教文学の中での巨人伝承の系譜をたどり、巨人・異形伝承の構造、ユダヤ教伝統の中で果たした役割を考える。

## II. Gigantes の運命—古代中世ヨーロッパの巨人伝承の変遷

大沼由布（同志社大学）

元来ギリシア神話の一巨人部族であった Gigantes は、「巨人」を示す一般的な語となり、西洋中世においては、大きく分けて二つの系統に分類出来ると言える。一方は、プリニウス（1世紀）に代表されるような西洋古典系統の、自然の戯れとしての周縁の民で、もう一方は、カインやハム、さらには墮天使あるいは悪魔の子孫としての、呪われた血筋の顕現という聖書由来のものである。この二つのイメージは、セピリアのイシドールス（6～7世紀）がその著書『語源論』において、ギリシア神話由来の語源と聖書のエピソードとを、つながり

を否定しつつも並べて紹介したことによって、逆説的ではあるが、同様に認識され、地理的にも宗教的にも他者の象徴である巨人像を形成していくことになる。

本発表では、特に『マンデヴィルの旅行記』に注目しつつ、西洋古代中世の博物誌、百科事典、地理誌、旅行記、神学的著作を取り上げる。これらを通じて、二種の「巨人」のイメージがどう発展し、どのような意味をもち、実際には作品ではどう活かされていくのかを考察する。

### Ⅲ. 中世イスラーム世界における巨人像—ペルシア・アラビア語博物誌に見るアードの民

山中由里子（国立民族学博物館）

アードの民とは、太古の時代に神の教えを拒んだために滅ぼされた巨人族としてイスラームの聖典『クルアーン』にも言及されており、「失われたアラブ」の内の一族とされる。本発表では、12世紀後半から末頃にかけてムハンマド・トゥースイーによって編さんされたペルシア語百科全書『被造物の驚異』や、トゥースイーより1世紀ほど後にカズウィーニーがアラビア語で記した同題の百科全書に収録されたアード族に関するいくつかの伝承に注目し、中世イスラーム世界のコスモロジーにおける巨人の位置づけを探る。

博物学的な文脈に再編成されたそれらの情報から、典拠となったであろう宗教説話（クルアーン注釈書や聖者伝）、アレクサンドロス伝承、旅行記、年代記などを辿り、大昔に滅びた古人類、あるいは終末の時に再び現れるかもしれない野蛮な民族という、地理的にも時間的にも遠くのものであるその存在の意味を明らかにする。

### Ⅳ. ゴグマゴグ討伐とブリテン建国—年代記とロマンスにおける巨人像の変遷

岡本広毅（立命館大学）

ジェフリー・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』（12世紀前半）を実質的な始まりとする *The Brut chronicles* 『ブルート』は、中世を通して絶大な人気を博し歴史観の形成に寄与した。中でも、古代トロイ人による先住巨人族ゴグマゴグの討伐は、入植者の英雄性・正統性を高めるばかりか、コロニアルな歴史の幕開けとなる重大なエピソードとして踏襲された。一方で、巨人の表象は時を経て幾分変化し、単に唾棄すべき敵対者・他者の範疇を越えた存在となる。征服者の陰に埋もれた（「忘れられた」）巨人は王家の血筋、土地の所



有権を有する歴史の証人として再来するのだ。本発表では主要な『ブルート』年代記の巨人像の変化に着眼した上で、ロマンス作品におけるゴグマゴグ討伐の記憶による刻印とそれに基づいた独自の展開について考察したい。

## 研究発表

### 1. *Henri was gehaten* 一人・場所・物の呼び方

小倉美知子 (千葉大学名誉教授)

古英語において人物・場所・特定の日・武具などの「呼び方」には、*cweðan*, *cigan*, *clypian*, *hatan*, *nemnan* などの類義動詞が用いられている。受動形 *hatte*, 「不定代名詞 *man/mon* + 動詞」の表現も、迂言形「*be* + 過去分詞」と共に用いられる。過渡期から中英語になると *hatan* の形態的多様性から受動の意味での単一形としての *hatte* の存在は保てなくなり、*cweðan*, *cigan* もこの用法では用いられなくなるが、*clepen*, *hoten*, *nemnen* は中世を生き延びる。本発表では年代記とその要素を持つテキストに焦点を当て、*Parker Chronicle*, *Peterborough Chronicle*, *Orosius*, *Lazamon's Brut* (MSS C and O) におけるこれらの類義表現の使い分けと経緯を調べる。説教集や聖人伝にこうした表現が多いことは分かっているが、人物名が大部分なので、人に対する場合と場所に対する場合とで動詞・用法の違いがあるかを調べるためには、年代記の方が明確な結果が出るのではと考える。また、*Lazamon* を加えることで表現の違いが通時的・文体的に見られるか期待したい。

### 2. コーパス (YCOE) に基づく古英語の時制辞の語順変化の分析

小林茂之 (聖学院大学)

本研究では、古英語の文法タグ付きコーパスである YCOE (The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose) から、Treebank Search を使ってデータを抽出し、Excel およびフリーのアドインソフト「正規表現検索」を使って、明示的な手順で文法タグを利用して用例を抽出し、分析結果を再現する。

Ringe and Taylor (2014: 396-9) は、YCOE から時制辞文(節)末 (T-final) の確実な例として V (infinitive)-Aux の用例をあげるとともに、時制辞非文(節)末 (T-Initial) のダイアグノシスとして、四つの構文をあげている。YCOE データの検証は必ずしも容易ではない。そこで、本研究では、V - Aux が文末に

ある用例と非文末にある用例を『テュロスのアポロニオス』、『諸聖人の生涯』のコーパスから類例を抽出し、Ringe and Taylor のデータを検証する。

### 3. キリスト教的教訓伝達媒体としてのラテン語箴言：『農夫ピアズ』と *Auctores octo*

西川雄太（慶應義塾大学大学院）

本発表では、ウィリアム・ラングランド著『農夫ピアズ』Piers Plowmanにおけるラテン語箴言の中から *Auctores octo* に由来するものを取り上げ、それらがラングランド自身のキリスト教的教訓を伝える *pastoral care* のためのひとつの媒体として機能していることを論じる。まず、中世の『詩論』*Ars poetriae*におけるラテン語箴言の機能と活用についての記述を具体的に整理した上で、ラテン語引用句について「同時代性に伴う権威、簡潔さ、記憶しやすさの3つの特性を兼ね備え、特定の文脈に依存しない言葉の彩」という定義づけを試みる。また、ラテン語教育のための読本として流布した世俗詩集 *Auctores octo* に収められたラテン語箴言は、中世において徐々にキリスト教的文脈において引用されるようになる。こうしたキリスト教化の背景などの歴史的な文脈や『詩論』に基づく定義づけや考慮に入れることで、『農夫ピアズ』におけるラテン語箴言の修辞学的機能について、学際的な中世研究の視点から明らかにすることが可能となる。

### 4. Material Aurality: Text, Image, and Stone in Early Medieval England

Britton Brooks（東京大学）

The recovery of sensory experience of any moment chronologically, culturally, and linguistically separated from the present is necessarily an imaginative act. As Mark M. Smith notes, the 'senses are historical' and are 'not universal but, rather, a product of place and, especially, time'. Even when such experiences are inscribed in text and image, the context of the initial encounter with the sensory event, as well as both the subsequent encoding of that information into material signification and the context of the original audience for that cultural production are, to a great degree, irrecoverable. What can be achieved, however, is an interrogation of how early medieval peoples chose to represent sonic events in their cultural

productions. This paper will explore the representation of sonic events in early English material culture, with particular focus on manuscript and stonework, in connection with literary texts. I will argue that early medieval images, whether inked onto parchment or inscribed on stone cross, were intended to evoke aural as well as visual sensory engagement. This study will reveal the depth of early English interactions with, and representations of, their aural lives.

## 5. 英訳聖書における使役動詞 *let* の補文に出現する不定詞の分布と *let NP to-Inf* の衰退要因について

村岡宗一郎（日本大学大学院）

PDE において、使役動詞 *let* は補文に原形不定詞を取る構造が一般的である。しかし、歴史的に *to* 不定詞を補文に取る例も散見され、さらに、EEBO を用いて調査を行ったところ、*let NP to-Inf* は16世紀後半に多く見られ、その後1650年代を除き、減少した。本研究では使役動詞 *let* の *to* 不定詞補文が消失していった過程を各時代の英訳聖書を用いて、通時的に分析することを目標とする。英訳聖書では、*let NP Inf* は EModE にかけて大幅に増加しており、使役の意味に加えて、特に命令文の形を借りて、祈願の意味で用いられ始めたものが多く、*let* の意味が拡張した時期と *let NP to-Inf* が衰退した時期が重なることが明らかになった。Akmajian (1977) や Duffley (1992) によれば、原形不定詞は当該の動作が完結されたという結果事象を表すとされているが、*let* が祈願の意味で用いられる頻度が多くなったことから、祈願は、物事の成就、つまり祈願内容の達成・完結を表すために原形不定詞が用いられ、PDE においても、*let NP to-Inf* ではなく *let NP Inf* が確立したと考えられる。

## 6. *Pearl* : 平凡な宝石商に見る崇高な魂

渡辺直子（産業能率大学）

*Pearl* の主人公の宝石商はごく平凡ではあるがまじめな信徒であった。しかし愛する娘の死により、神の摂理に思いを馳せることはできなくなる。ある日、宝石商の夢の中で娘は神の摂理と真の天国を語り、宝石商は天国を遠目に見ることができた。目が覚めた宝石商は御旨に従って生きようとその魂は変化していた。

異界を描いた中世作品と比較して、*Pearl* の特徴的な部分は、作品全体に流

れる「身近さ」「素朴さ」である。平凡な宝石商が娘を失った悲しみ、美しい夢の中の世界を見た驚き、そして娘に再会した喜び…。ごくありふれた日常の感情が作品の全編を通して見ることができる。しかし、宝石商の「困難を乗り越えようとする真摯な姿勢」は確かな美点であり、天国の門を開くことに繋がっている。

*Pearl* 詩人は、「平凡な者」がその魂を飛翔させ、精神的に高い次元でこの世の生を送れることを描いており、*Pearl* には希望が満ちている。



# ENGLISH EXPRESS

CNNライブ収録CD付き 毎月6日発売 定価(本体1,148円+税)



定期購読の場合、本誌1号分無料ほか、特典多数。詳しくは右記ホームページへ。

**英語が楽しく続けられる！**

CNNの多彩なニュースを生の音声とともにお届けします。本当の英語力が身につきます。

**資格試験の強い味方！**

ニュース英語に慣れれば、TOEIC<sup>®</sup>テストや英検のリスニング問題も楽に聞き取れるようになります。

<https://ee.asahipress.com/>



**朝日出版社**

〒101-0065 東京都千代田区西神田 3-3-5 TEL 03-3263-3321

## 英宝社 好評既刊本

O.イエスペルセン 著 米倉緯 監訳 A5判/440頁/5,800円+税  
**英語の成長と構造** Growth and Structure of the English Language

ジェフリー・チャーサー作 笹本長敬 著 A5判/296頁/3,400円+税  
**トロイルスとクリセイデ** 付・アネリダとアルシーテ

GEOFFREY CHAUCER 著 松下知紀 訳・注 A5判/308頁/2,800円+税  
**THE CANTERBURY TALES** THE KNIGHT'S TALE カンタベリー物語・騎士の物語

英宝社

<http://www.eihosha.co.jp>

